令和8年度　アーツ前橋事業評価調書（展覧会用）

資料　3-(2)

事業名	ぬけみち展　かわる・つくる・ともにいる―生きるための回路					
担当者	高橋由佳、東美沙季（学芸）、菅原梨恵（事務）			実施方式	01自主企画・単独方式	

印刷物等	ポスター（B2）	チラシ（A4）	館内マップ	セルフガイド	リーフレット	図録
	700部	3,500部				1,000部

収入／支出	収入（A）	支出（B）	収支比率（A）／（B）	入館者一人当たりコスト	収入内訳		
					観覧料	助成金	他
予算	10,505,180 円	18,130,360 円	57.9%	4,532.6 円	1,440,000 円		9,065,180 円
決算見込	11,143,254 円	18,077,708 円	61.6%	2,330.2 円	2,104,400 円		9,038,854 円
差額	638,074 円	-52,652 円	3.7%	-	664,400 円	0 円	-26,326 円
予算/決算	106.1%	99.7%	106.4%	59.1%	146%	#DIV/0!	99.7%

・広報戦略 ・新たな試み	・従来の美術関係者・美術ファンを中心とした広報に加え、デザイン、建築、DIY、まちづくり等の実践者・専門家や、人文・文化に関する情報を発信するポッドキャスター等、本展のテーマと親和性の高い異分野の発信者・コミュニティへのアプローチを行った。 ・通常の広報リストに加え、県内のデザイン・建築系専門学校にも広報物を配布し、これまで美術館との接点が比較的少なかった若年層・専門分野の学生への情報発信を行った。
広報実績［新規掲載や効果大の媒体など特別な案件］	Tokyo Art Beat、美術手帖、Artnews Japan、毎日新聞全国版等の主要メディアに加え、POPEYE、NiEW等のカルチャーメディアにも掲載され、美術関係者にとどまらず、デザイン、建築、カルチャー等に関心を持つ幅広い層への情報発信につながった。

入場者数(参考数値) 上段：人数（人） 下段：割合（%） ※色付きは有料	一般	学生	65才以上	団体	高校生以下	障害者	招待券	割引等	他	イベント	合計（人）	日平均（人）
	2,316	315	146	20	730	232	487	9	3,628	371	7,758	176
	29.9%	4.1%	1.9%	0.3%	9.4%	3.0%	6.3%	0.1%	46.8%	4.8%		

一般指標	指標	目標値	達成値	達成率	特記事項
	入場・参加者数	4,000	7,758	194.0%	
	展覧会満足度	80%	81.5%	1.5%	アンケートの「満足」、「やや満足」割合（無回答を除く）

観覧者層のターゲット	・県内外の10代～50代を中心とする、現代社会のあり方やカルチャーに関心を持つ層
成果	・アンケート回答者の54.8%が初来館者であり、これまでアーツ前橋が十分に接点を持てていなかったと考えられる層への新たなリーチにつながった。 ・通常の展覧会と比較して平日の来館者数も多く、10代～20代を含む若年層が来館する機会を創出した。
ねらい1	「ぬけみち」という視点から、現代の閉塞感に対する多様な応答のあり方を提示する
成果	・「色々な視点から、自分の偏見などはっとさせられたり、広がりを感じられてとても良かったです」や「普段は見逃している、心の奥のざわざわを思い切り感じられました。」等の来場者コメントから、作品を自身の日常や経験と結びつけて鑑賞する反応が見られた。 ・「展覧会の内容がすばらしく、今、この時代に応答する内容、大変良かったです。文化芸術にできることを市民に真摯に届けているものと思いました」や「生きるということはどんなものか、私達は生きていく上で、どんなものをかわし、、つくり、という自分の生きている意味についても深く考えることができた」等、「ぬけみち」という考え方そのものへの共感を示す声も多く、展覧会で提示した問いを来場者自身の生活に引き寄せて考える機会につながった。
ねらい2	関連プログラムを通じて、展覧会テーマを身体的・実践的に体験する機会をつくる
成果	・阿部航太による映画上映、ドットアーキテクツによるトーク及び前橋市内の職人と協働した全7回のワークショップ「アーキジム」を実施。 ・鑑賞だけでなく、対話・制作・実践という複数の方法から「ぬけみち」というテーマにアクセスできる機会を創出した。
ねらい3	デザインを軸に専門領域を横断し、展覧会を起点とした議論を構築する
成果	・図録では、現代デザイン、現代美術、建築、日常美学等の専門家によるテキストを収録し、「ぬけみち」を複数の専門領域から考察した。 ・本展での問題提起を契機として、東京藝術大学主催シンポジウムへの登壇依頼や、デザイン・アート・日常美学・文化人類学を横断した継続的な議論の場の構築につながるなど、展覧会終了後にも専門的議論が展開している。
課題・改善点	展覧会で生まれた議論を継続・発展させる仕組みづくり ・図録や関連プログラムを通じて、領域を横断する議論を生み出すことができた一方で、こうした議論を一つの展覧会で終わらせず、次の企画や研究、他機関との連携へと継続的につなげていくことが今後の課題である。